

書館も、時代の波に乗り、漸く慈愛の曙光に浴せんとしてゐる。之を改築し、制度を刷新し、外觀改むると共に、内容亦改善されて、眞に圖書館の持つ機能をして、十分にその腕を揮はしめ、以て潑瀾たる文化の驕兒たらしめんには、一に之を支持する縣下人士の普ねく良き理解と、深き同情に俟たねばならぬ。されば時に自分自身、何等圖書館を利用なさぬ故を以て、圖書館に風馬牛たるは、「個」の門扉を堅く閉ぢ、社會人としての認識の鏡に、或は曇の影かざされて居るに非ざるやを思ふ次第である。

何れにせよ、今日までの我が縣立圖書館はあまりに振はざりしこと明白の事實である。その素因何處にありしやを姑く不問に附す。冀くは現今全國縣立圖書館界最下級位にある我が郷土の圖書館をして、今、十分なる機能を發揮せしめ得るやう、諸彦の奮起と御後援を祈らざるを得ない。

常に公衆と共に

—公共圖書館の使命—

「常に公衆と共に」

公共圖書館の目標は一つにこの言葉でなければならぬ。それ故仮りに公衆に背をむけて、死藏圖書の多きを矜り、官僚氣分あまた漲りて公衆と隔てを置くやうな圖書館であつては、吾人到底齒ひすること能はぬものである。

世、往々にして圖書館は學者、學生の行くべきところ、彼處にて靜かに讀書をするところの念を抱いてゐる者がないではない。また事實、學者は兎も角として、最も圖書館を利用してゐるのは學生諸君である事は、本邦圖書館界の目下の現状である。けれどもそれだからと言って、圖書館經營者が、現状のまゝで伸んびりとしてゐるやうでは大に困る。圖書館經營者は、常に公衆と共にあるとのモットオをかざして、圖書館自體の本然の使命に向つて直進せねばならぬ。

私は圖書館は公衆に背を見せてはいけなと言つた。全く、その通り、常に公衆と顔を突き合

せ、公衆の顔色を絶え間なく眺めてゐなければいけない。公共図書館は、決して學者、學生諸君等の爲にのみ在るのではない。吾人のこの念願が本當に理解され、社會の隅々に迄行き亘つてくれるならば、圖書館事業が大に發揚されること必しも空想ではないと思ふ。

圖書館は朝から夜に至るまで机にかがりついて、一生懸命に勉強もし、研究もするところだといふ念が、まづ一般の人の思惑であるらしい。成程、時にはさういふ心がけて入館される閱覽者もあり、又さういふ人々のために、圖書館も或る設備をしなければならぬかも知れない。けれども、それが圖書館本然の使命ではない。

もし終日閱覽室にあつて讀書をなす者のための圖書館ならば、圖書館はよろしく幽邃閑寂な地位に建てられ、閱覽室は殊に靜閑なる位置を選ばねばならぬ。従て交通機關その他都市機關から遠く距たつても何等差支へがないばかりか、都市の俗塵を遠く離れるほど、より効果的であるべきである。

けれども、公共図書館は、決して個人の書齋ではない。まして學者等の研究室ではない。圖書館は常に公衆と共になければならぬ以上、その設立地位は最も交通に便利であり、公衆をして容易に近づきやすき地位でなければならぬ。そこでは、無聊に苦む人士の閑つぶしに來るのも迎

へ、通りすがりの諸君に新聞雜誌をも提供する。まづ旅人來つて觀光の案内を乞へば、郷内の文獻積んで心から説明もするであらうし、寸暇をぬすんで調査に來る公衆に對しては、あらゆる便宜を與ふべきであり、まして學童のためには圖書に親しむべき道場として、彼等の伴侶、指導者としての設備をなすべきである。乃ち公共図書館の眞生命は、かくあつてこそ最もよく發揮される筈である。しかも、熟讀繙書靜に讀書をなさん者のためには、貸出組織に依り、自分の家に持ち歸り得る法もあるわけである。

かく述べ來る時、公共図書館は常に公衆と顔を突き合せ、公衆と共にあつて、時代の波に打ち乗り、ますます進展せしめねばならぬ。かくてこそ、眞に社會的文化事業の中軸となつて、圖書館の機能を發揮し得る所以である。

海の魚と図書館

図書館週間に於ける児童への講演大意

海には夥しい魚類の群がある。海底深く沈むもの、海面に大群をなして浮遊するもの數限りがない。我々はさうした魚を目ざして釣に出かける。ところが海に魚が満ちあふれても、たゞ無暗と釣糸を垂れるだけで、わけなく釣上げられると思つたら間違ひである。魚にはそれ／＼の習性特徴があるため、それに應じた針やら糸やら餌を持つて行かねばならぬ。魚の棲む場所などにも饒通せねば、思ふやうに釣の樂みを得ることができぬ。乃ち釣の初心者、まづ釣客の先輩などに従つて、その指導を得なければならぬ。そこで初めて望みのまゝの魚を釣上げることができらうになるのである。

話題を代へる。

世の中には夥しい書物の群がある。たとへば海の魚族のやうに——。我々はその中から書物を選ばうとする。手あたり次第に書物を讀んだ處で、それは何の効果もない。たとへば海に無暗と

釣糸を投げるやうに——。我々は自分の要求する本を、一般が思ふほど、たやすく見つかるものではない。しかし條理をたて、求むるならば、それは面白いほど自分の要求を充たしてくれる本が讀める。諸君はその條理なり、手引なり、指導を學校の先生から受けて後、自分の求むる本を探すならば、本當に書物を有効に讀むことができる。それは恰も釣の初心者、その先輩の指導により、選ばれた針や糸によつて、有効に魚を釣ることが出来るのと同じである。

図書館は、言ふならば書物の水族館である。鯉なら鯉、鯛なら鯛と分類して、いろ／＼の鯉やら鯛やらの種類を整理してある水族館のごとく、図書館では、歴史なら歴史、地理なら地理といふ風にそれ／＼分類しておいてある。諸君は學校の先生から教へられた知識を以て、自由に図書館に行き、讀みたい本を選ぶがよい。讀書の樂みが盡きず湧いて來る。

良書の選擇に就て

公共圖書館に於ける

圖書選擇は圖書館が有する重大なる使命の一である。強ひて言はゞ、その圖書の選擇如何により、その圖書館の地位が價值づけられるとまで言はる、程のものである。さればその選擇の任に當る者は、常に極めて細密なる注意を拂ひ、或は圖書目錄、圖書批評を見通すことなく、更に諸般の學問に涉る通識を廣めることに力め、同時に能く公共圖書館の性質立場を考へ、最も公平なる判斷の下に選擇されなければならぬ。

一、高尚にして専門的の圖書よりも、寧ろ社會大衆の要求する通俗圖書を選擇し、その活用に留意せねばならぬ。但し大衆の直接的卑近なる希望要求にのみ重點を置き、その圖書を選擇せんか、單に公衆に對しての盲従者、隨伴者たるに終り、その圖書館の地位は漸次低下するを免れない。即ち圖書館は常に公衆の指導者であることを忘れてはならぬ。

二、公共圖書館は又その所在地並に所在縣下の狀況並に閱覽者の讀書力を洞察して、その地方教化の誘導に力めねばならぬ。例へばその所在地が商工業地ならば、成るべく夫等の圖書を選擇

購入するは勿論であるが、たゞその讀書力を顧ざる時は、何等の効果が無い。

三、閱覽者の閱覽率を常に参考し、ある部門の圖書閱覽冊數の率に比較して、その部門の藏書冊數が閱覽者の要求を満して居るや否やに留意して、選擇をせねばならぬ。

四、今日右から左への要求が無くとも、古今に涉りて、永久的價值ある圖書を備へ、之によりて積極的に讀書趣味の涵養に努める必要がある。

五、法律、醫學書、その他の科學書などは専門的のものでなく、一般向き通俗的のものを選択するは圖書館の常識である。それ故、公共圖書館に對して、往々専門的なる參考書或は研究書購入の要求をされても、その要求を全部満たし得ることは豫算額から言つても至難のことである。

六、郷土關係の誌料は努めて蒐集する必要がある。之はその集書を通じて、その地方民の過去現在に亘りての意向、生活、その他地方的の知識を増大せしめ得るのみならず、愛郷心を深め、又風教上からも大なる裨益する所があるからである。而してその蒐集は一時になす焦燥よりも之は常に郷土誌料に留意し、得るに従ひ自然に蒐集するといふ方法を講じるがよい。

尙ほ兒童圖書の選擇に就ては、特別の注意がいる。

裝飾本時代來迎

一

文化の發展とは何を意味するか。人生の機械化といふ言葉に置き替へられても、さう地口のあはないといふ事は無い。道を歩くにも、明治時代と昭和の時代とは大分ちがふ。國木田獨歩は何と言つてゐる？

「君もし武藏野に出でて路盡きることがあつても悲しむなかれ、君はその百姓家に聲をかけてその庭を通らしてもらふがよい。乃ち路は君を林の中に導くであらう。林を抜ければ思はぬ路にも打突からう」なんて兎にかく思ひのまゝ、自分の足の向くまゝに歩いてよかつたのだ。

今はどうだらう。都會を歩くに自分の足にして自分の足の用をなさない。忽ちGO・STOPの目標だ。あの機械の指し示すまゝに、停つたり、走り抜けたりせねばならぬ。まことに文化は人生の機械化を強示する。

僕等讀書子にとつて、圓本洪水時代があつた。これもつまるところ人生の機械化に乗せられた

産出物である。しかしそのお蔭で、乃ち大量生産の結果、讀書子にとつては、古代稀觀本視されてゐるものにする、廉價に、容易に近付くことが出来るやうになつたのは、まことに文化發達の餘光に浴し得て有りがたいと思ふのである。此の點實に圓本様々である。

しかし翻つて想ふ。大量、廉價、そのみが圖書の使命であり、書物の性能であると早合點してはいけない。それは譬へて言へば人生は日々の食糧と仕事が十分であれば満足だといふのと變りがない。その食事にしても一汁一菜で米の飯に有りつけば結構には違ひがないが、時には海老のテンブラ、鮪の刺身も口にしたいくなるのはあたりまへである。手一杯に仕事があり、その仕事に没頭しきれることも幸福であらうが、時には芝居的一幕でも、音楽の一節でも觀たり聽いたりしないでは、人生はあまりに實用的であり、索漠たるものである。マルクスのイデオロギイからいふ時は藝術もあまりに實用化されたものであるが、マルキストでない僕にとつては、アスファルトのやうな人生道路から、一步足をそらすべき柔らかい草地がほしい。言ふならば武藏野の黒土を貫く味のある路さへほしいのである。乃ち人生の機械化から脱して、人生の本當の姿を見たいのだ。

僕はこの意識を圖書の上に演繹してみたい。

こゝに挿話を入れる。

ある時、Aといふ男がBといふ藏書家を訪れた時、その書齋に入つて壁間の書架にぎつしりと列んだ夥しい圖書を見た時、一驚もし、三嘆もした揚句、次のやうな嘆聲を發した。

「君、こんなに書物を持つてゐるが、よく讀む暇があるね」

「何故さ」

「だつて、この内の一冊を讀み上げるんだつて容易なことぢやないのに、よくあとから／＼と讀めたものだと思ふからさ」

そこでBが笑つて曰く。

「馬鹿なことを言ふなよ、誰が一冊の本を頭から尻尾まで讀む奴があるものか。その人にとつて必要なのは、一冊のうちの或る小部分だけなのだ。だから、勿論初めから終りまで讀むつもりで僕は本なんか蒐めてやしないよ」

「なあんだ、さうか。では所謂昔からいふツンドク（堆讀）といふやつぢやないか、それでは一向つまらん話だ」

「そんなことがあるものか、列べておいても堆んでおいても結構さ。たとへ書いてあることが平凡なことでも、本そのものゝ個性がおもしろく出てゐるならば、本それ自身に價值があるからね」

「さうかな」

「さうさ、圓本などの大量生産からは勿論本の個性なんかは見出し得ないが、機械から離れた本當の意味における本の製作となると、立派な藝術なんだ。同じ柄杓でも、荒物屋や公設市場に賣つてゐるものと、千利休が自ら造つたといふ「蟲くひ柄杓」といふ名物すらあるのだ。一方は金十錢也で、片方には萬金を投じてともいふ意氣込みなんだ。違ひがそこにある。實用化された圓本は電車の中でも讀めるが、工藝品としての本それ自體を表現されたものは書齋の飾りとしても立派なものである。だからツンドク必ずしもわるくないといふのさ」

Bは更にAをまくしたて、氣焔を揚げる。

「兎に角、本の價值は生命の永遠性如何、並に個性の表現如何によつてきまるものである。この點、圓本などは、どこからみても一時的の存在であり、到底永く保存の出来るものではない。それがまた彼の使命で、廣く廉くといふモットーに相應してゐるのだ。讀んでしまへば賣拂つて

も一向惜しくはないからね。だけど書物の凡てがさういふ安つほいものであつてはたまらないね。たとへ文化が進み、人生が機械化されたと言つて、永遠の生命のない書物ばかりの跋扈ではやりきれないよ。ちつとは骨のある、感じのいい、書物が出版されていて、と思ふのだ。昔のことを例にとつてすまないが、日本に於ける嵯峨本、光悦本、大内本なんて、すいぶん凝つたものさ。それだけに書物それ自身の生命が永續するのだ。更にモリスのケルムスコト版なんて、本當に彼自身の手にかけてたもので實に尊いからね」

「さう言へば全く書物は立派な藝術品だな」AとBの會話はこれで終つてゐる。

三

茲に至つて僕の命題であり結論である「裝飾本時代」來迎に就ての短い詞を送らう。

市内を流す圓タクの數多い中から、この節では成るだけ綺麗な乗心地のよい車を選ぼうとするのは人情である。たとへそれがフォードにしろシボレーにしろ、その中から、更に三〇年式、三一年式の新型を擇ぶやうになつて來た。この心理は、圓本洪水の災害から漸く目ざめて、更により良き書物、乃ち書物の裝釘圖案は勿論、紙質の如何を吟味し、活字の號數を調べ、その刷上り

を云々して、層一層書物としての個性のよく表現されたもの、藝術的薰香の高きものをと望むやうになるのは當然である。

この機に際し所謂「豪華版」なるものが現出した。これは一種のデモであるが、デモでも結構、このデモに乗つて、白帆を張つた本當の裝飾本が、心ある書肆の忠實なる奉仕により、あとからくと現はれるならば全く昭和聖代の盛事でなくて何としよう。後世に至つて、ビブリオグラファーが昭和版なんていつて珍奇がるやうな、所謂イルミネイテッド・ブックの現出を望むのである。

但し今日世間に云ふ豪華版なるものは尙ほ貧弱なもので、その製本の一分業である裝釘の方から言つても、文字の所謂裝飾活字の點からも、タイトル・ページの裝飾から言つても、今後十分に研究すべき餘地があると思ふ。徒らに豪華版の名にくらんで、現在出版された二三を以て事足れりと思つては大間違である。

結論として、僕はイルミネイト・ブック乃ち裝飾本時代の一日も早く出現せんことを望む。

我等の圖書館の完成

「我等の圖書館の完成へ」の言葉が、昭和十年度「圖書館週間」に於ける當和歌山縣立圖書館の標語であつた。

乃ち現在當縣立圖書館は、その設備の上に、組織の上に、人員の上に、その他いろいろと數へられる点に於て、不備、不完、不足の數々がある。我等は極力その点に就て研究し、最善の努力を惜しむものではない。

しかし我等のみの努力だけでは到底この完成への道は手近に來ない。この上には非とも大衆諸君の同情と支持がなくては達成すること覺束ないのである。そこで「我等の圖書館」の意識を強く持ち、その完成への拍車を願ひたいのである。

大衆の強力なる聲援に送られて、事務にたづさはり、大衆の同情ある鞭撻によつて、事業達成への精進を怠らなければ、必ずや其目的の成就是近い將來に來ることを信じる。

我等が圖書館を愛し、誠心誠意我等が圖書館の完成へと盡す時、天神地祇まづみそなはせ給ふことを信ず。乃ち此の愛念、熱を生じ、熱は人心を動かさすには置かない。

革新の一點

新らしき書庫にも輪飾かけてみし

南草子

昨昭和九年の新春、新裝なれる圖書館を夢想して、この句を物してみたが、明けて十年のお元日、我が和歌山縣立圖書館は舊態そのまゝの貧しい姿をデヴェューせねばならぬ有様である。縣豫算の立前から九年度に完了すべき事業を十年度まで延期せねばならなくなつたのだ。そこで私たちの祈念することは、この十年の猪歳に際し、萬難を排して勇猛突進して、今年度こそは積年の希望である圖書館の改築が實現されて、冒頭の拙句が本當に生きてくれることを祈る。

圖書館事業が文化の上に如何に密接な關係があり、近代社會教育の立場から如何に重要視せねばならぬかは、既に斯界論壇に於ては十分述べつくされ、全く常識化されてゐるに拘らず、尙一般社會に於ては、圖書館の認識普遍化されななためか、圖書館を目して、時に閑事業の一つかの如き口吻を洩らす識者のあることは遺憾に堪へない。而も、一面、我邦最近の圖書館の發達は漸

く陽光に浴せる春草のごとき意氣に燃えつゝある。この時、この際恰も我が郷土和歌山縣に於ては、明治四十一年時代の老朽物に代ふるに時代に適應したる新設備の新館をもつて飾らんとする。新酒は古き革袋に満たすことを得ず、まづ新酒を盛らんとするには、古きを捨て、新らしき革袋を用意せねばならぬ。實に革新の一步はこの一點にある。外形の新装なる時、陳腐はおのづから代謝す。

尤も新装せんとする圖書館の規模がどんなものか私共にはまだ圖り知れない。けれども和歌山縣下の中央圖書館として主務省から指定されてゐる以上、之が機能を發揮できるだけの設備はあること、信じる。

それ故今年この歳首に際しては、縣立圖書館の一日も早く新装ならんことを祈るばかりである。革新の一點はこゝにある。

昭和十年年度の
年報を通して

和歌山縣立圖書館を願ふ

今作製されたる昭和十年年度年報の統計を通して、我和歌山縣立圖書館の一般の情勢を願ふに、そこには幾多の解決をなさねばならぬ問題があると思ふ。

一、圖書館の現状

先づ圖書館の現状を打診してみると、飽滿の腹に波を打ち、所謂のたうち廻つてゐると言つた有様で、老朽の體軀に擔ひきれざるばかりの重荷を負はせて、尙ほ鞭を與へんとしつゝある状態である。乃ちその圖書運用の源泉たる書庫及び書架は舊式にして而かも詰められるだけ圖書を收藏せしめ、尙足らずして凡ゆる空間を利用して圖書は堆積せられてゐるといふ状況である。それがため圖書出納の勞多くして徒らに能率の上らざる始末である。閱覽室の狹隘は既に中央圖書館たるの名に恥しく、他府縣の町村立圖書館にも等しき有様故、滿員の札を掲示すること屢々にして、閱覽者にその不便をかこたしめざるを得ない。特に兒童室は一般閱覽室の一隅にありて座席

僅かに二十を算するに過ぎざるため、土曜、日曜、その他の休日の際は常に登館兒童の全部を收容しきれず、空しく帰宅せしむる有様である。

斯くのごとく圖書館在來の業務を施行するに當りても不便、不足を感じるに拘らず、その上中央圖書館の任務を遂行するには館員の數亦少きを覺ゆる次第である。要之に今や改築の一日も早く實現せられんことを祈ると共に、館員の増加を計らざるに於ては、到底十分の機能を發揮することは出來難いのである。

二、藏書狀況

十年度末現在藏書冊數明細表は別表に示すごとく、總冊數四三、七五一冊（外に巡回文庫用四、〇一九冊）にして一年間の増加冊數は一、七〇九冊（巡回文庫は一、〇一八冊）である。その各部門に於ける増加率の高峰が文學及歴史にあるは圖書館一般の標準ではあるが、本館本にては、一般の嗜好よりは稍高級なる標準を以て集書に意を用ゐる、特にこの地方として工業物の圖書等に力を注いでゐるが、他の一面巡回文庫には所謂通俗圖書を購入しつゝ、ある。尤も縣立圖書館の使命とし、將た中央圖書館の資格の一つとして郷土誌料の蒐集に意を用ゐること従前通りである。

三、閱覽人の狀況

本年度の閱覽人員總數は四九、〇九七人を算し、前年度四九、七七〇人に比し六七三人の減少を示してゐるが、蓋し前年度人員數は從來に比し異常なる増加を來たせしもので、收容力より觀る時は寧ろ好成績と言ふべきである。而かも館内閱覽の人員數四五、六八六人は前年度四六、五二二人に比し八三六人の減少を見るに拘らず、館外閱覽三、四二一人の數は前年度三、二四八人に比し一六三人の増加を示せる事實は、讀書斷層を一層民衆化し一層擴大せられたものと言へる。同時に亦閱覽室の狹隘、不快、設備の不十分をも如實に語るものと言へる。今之を一日平均に依る人員率に於て觀るに、館内は一六二人（前年度一六六人弱）館外は二人強（前年度一人強）總數は一七四人強（前年度一七七人）の數を示す。而て館内坐席は兒童女子及成人席總數は實に九〇に過ぎずして毎日一七四人づ、登館してゐるのである。

次に職業別により觀察するに、前年度統計と比較して減少せるは、學生及兒童にして、教育家、宗教家（前年度一、〇二七人）實業家（前年度四、九八〇人）女子（前年度一七二一人）にては寧ろ増加を示し、官公吏、軍人には異動なき状態である。

四、閲覽圖書の状況

閲覽圖書總冊數は九六、六四〇冊(新聞雜誌三〇、三二八を含む)にて、館内にては九二、七二二冊、館外にては三、九一九冊の數を示してゐる。次に之を部門別に於て觀るに兒童圖書並に新聞、雜誌を除きては文學、語學の多數を占むるは何れの圖書館に於ける現象であるが、前年度此の部門閲覽の數は二四、一一六冊なるに、本年度は一一、四一八冊に大減したる現象は、蓋し十年度購入の文學書が稍々減少せしめし結果かと思ふ。その反對に工業方面にては前年度は僅かに九五四冊なるに、本年度は二、四九五冊の閲覽されたる事實は、實業家方面に讀書層を深めた結果と共に之等の圖書に意を用ゐた結果と思はれる。又宗教、哲學、教育部門に於て前年度九、三一二冊に對し、本年度の四、八九四冊に減少したるは、一時流行であつた佛教書の波が引き去りしあとの靜寂にも譬ふべく、讀書層も着實になつたことが覗はれる。

之を要するに本年度は總數に於て前年度より減少はしてゐるが、その閲覽内容に至つては寧ろ充實した讀書層を持ち得て、質實なる閲覽傾向の見え初めたるを慶ぶ次第である。

尙ほ十年度及十一年度は我和歌山縣立圖書館の過渡期にあること、て、圖書館の有する機能を充分に發揮することが出來ないと共に、閲覽者側としても不十分なる設備のため利用價値の減少

されることは疑ひを得ない處である。要は一日も早く新館成り、設備の上に制度の上に改新をもたらしことにより、名實備はりたる中央圖書館としての立脚地を築き上げねばならぬ。

圖書館の晩秋

圖書館の周圍は今秋たけなはにして、櫺紅葉うるはしく野分の風にあほられて、槻の木の葉がはら／＼と散る。書を繙く窓邊に倚れば、秀麗なる天守閣眼のあたりに仰ぎ得る。心澄み氣爽かにして古今の聖哲の書に親しむには此の上もなき好季節なり、好環境である。閱覽者は颯爽として門を入つて来る。読み終へた彼等は快心の微笑を浮べて館を去つて行く。まことに南國に於ける讀書の秋である。新着の本の頁を開くたびに香り高いインキの香ひが散る。まことに圖書館萬歳である。

この時、恰も十一月十五日よりいよく改築の準備として、まづ現地位の地質調査のためボーリングが始められた。ドシン／＼と地面を掘つてゆく力強い音、それを窓外に聴きつ、館員一同の面にも生氣が満ちる。

我等が圖書館の改築、彌々その第一歩の工作を開始されたのだ。新しき響は何時何處で聞いても頼母しい。願はくは此の場所の地質堅牢ならんことを。茲は曾て舊藩主の二の丸跡であつたとか、やがて地面發掘に随ひ或は何ものか掘り出すやも知れぬ。

縣下圖書館の不振と貸出文庫の活用

我が和歌山縣圖書館事業の不振を聞くこと既に久しい矣。其間に在り去る紀元節の佳節に於ける文部省より優良圖書館として表彰されたる光風文庫の如き二三優秀なる私立圖書館の存在する事は、吾人斯界進展のため大いに意を強うし之を祝福するものなるが、願て縣下圖書館事業の一般を観るに、町村立圖書館の數に於ても内容に於ても名實共に日本全國の最下級に位し、有難からざる名譽を擔うてゐるのである。一例を以てしても、その經費僅に數百圓、之を管理する者一名、開館も亦常ならぬといふ有様である。縣中央圖書館に在る我等は一刻も早く此の不振を打破し假睡状態から覺醒せしむる責任があるが、同時に町村立圖書館の増設乃至設備管理の完全を期するは言を俟つまでもない。而して斯くするためには相當の經費と時日を要することも明かである。我等は兎も角もこの沈滞せる空氣を除き焦眉の急を救ふために何を爲すべきか。曰く巡回文庫（貸出文庫）の利用であり、活用である。之實に中央圖書館の使命であり、不振状態に精氣を送る鍵でもある。

巡回文庫の利用手続は極めて簡便である。管内町村私立図書館へは勿論、各種の公共團體に向つても容易に發送がき得る。

(紀南地方の図書館を視察して感あり)

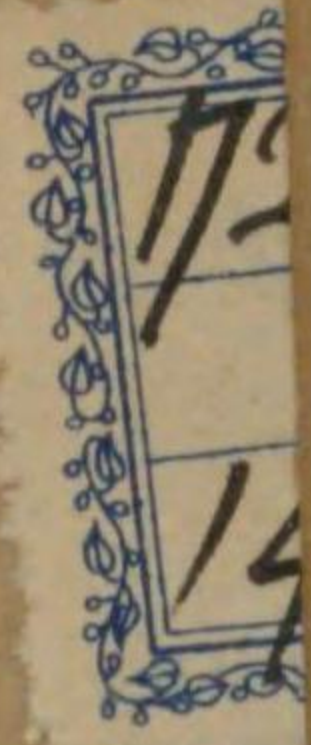
貸出文庫の利用と町村の奮起

図書館と言へば、一種重々しい氣分で登録し、七面例臭くカードを探し、漸く求められた書物の名や番號を記入して、それを貸出掛に請求する。貸出事務が迅速にゆかぬ。讀みたい本が中々容易に手に入らぬと言ふやうな考へが、まだ多くの人に抱かれてゐる有様である。しかしそれは既に時代遅れの昔の生へた考へと言はねばならぬ。

時代は飛躍する。何者も吳下の阿蒙であつてはならない。

我邦に於ける図書館の發達が、尙遅々たる歩みであるとのそしりがあつても、三歳兒である筈はない。尙ほ一般大衆からは風馬牛の感をもつて白眼視されてゐる図書館であつても、図書館自体は日進月歩の發達をなしつゝある。たゞ圖書の集積をなし一般人の閱覽を待つて貸出すといふやうな図書館は、最早や時代の波から遠ざかつて行くべきである。図書館は七面倒臭い所ではない。重くらしい空氣の漂ふ場所と思はれては以ての外である。

図書館は吾人日常生活の上に大なる交渉のある存在物であることを自覺されると共に、之が利



用に就ても十分の能力を挙げしめることが、館員は勿論ながら、社會一般人の使命でもあると思ふ。そこで圖書館所在地にあつては、容易く圖書館に至り、その求むる圖書の借出しを請求する便利はあるが、一度所在地を離れては、いかに圖書館自體が完備されても、何等利用する機會がなく、全く寶の持ち腐れのごとき感じがするのである。

私共はそのために貸出文庫乃ち巡回文庫の制度を設けてゐる所以である。

之は圖書館所藏の圖書五六十冊位を行李に詰め、縣内至る處の町村に向け發送し、三ヶ月間停めおき、各自の家に持歸り自由に閲覽せしめる方法である。それ故この配本を受けたとき町村では、その地の役場なり小學校なり、その他自治團體の責任者から、當圖書館に宛て請求されるば、送料は當館にて負擔して送附すべく、返却の時だけ請求者にて運搬賃を仕拂はれたら結構である。若し請求の時、例へば修養書なり歴史的の圖書なりを多くとの指定あれば、その請求に應ずべく、選定を當圖書館に一任されるれば、出來得るだけ各科に亘つての圖書を送附することにしてゐる。

斯くして如何に僻村とは言へ、居ながらにして縣立圖書館の圖書を閲覽することが出來ることになる。而も館報紙上に於ては隔月に巡回文庫用圖書の新着目錄を登載するから、その目錄によ

り請求されたり、他に貸出してゐない限りはその求めに應じられる筈である。

この貸出文庫の利用は漸次繁忙になりつゝあるが、他縣に較べて未だ之が効能知られざるか行き届かぬ町村が尙ほ數多にある。苟も和歌山縣中央圖書館の指定を受けてある以上、此の貸出文庫制度の具備に對しては吾人圖書館事業に従事する者の努力は勿論、一方地方町村の注意を惹起して、之が利用活動のため奮起せられんことを、偏へに希望する次第である。時恰も夏時、この際讀書三昧に精進することは、實に炎暑征服の痛快事でもある。敢て町村在住の諸彦に一顧を乞ふ次第である。

貸出文庫利用のすすめ

讀書なき一日はさびし

忙はしいから、疲れたから、と言ふやうな理由で、讀書から遠ざかるのは、尙讀書の眞味を深く悟らず、讀書生活に親しみを得ぬことに起因する。勿論、多くの中には心を緊張せしめ、寧ろ疲勞を誘ふ種類の圖書は有る。しかしその反對に、張切つた心を和ませ、疲れた身にも清新なる靈氣を與へる圖書の存在を知る時、私共は一日たりとも讀書から遠ざかることの理由なきことを知るのである。要は讀書に親しみ、讀書趣味の涵養に努めることである。

しかし個人としては、その思ひのまゝなる圖書を購ふことは、種々なる事情によつて、容易に果し得ない。まして都市を離るゝこと遠き農村、山村に在る者にとつては、圖書に接する機會さへ、さうやすくは恵まれてはゐない。渴望しつゝも、圖書を手にすることは至難である。

だが、そこにこそ、中央圖書館々外活動の職場が與へられてゐるのである。中央圖書館は、その職場に向つて、觸手を出來得る限り伸ばさうとするのである。所藏圖書を縣下に向つて開放し

ようとするのである。之によつて農山村の人々等は、村に於て日夜働き居りつゝも、ゐながらにして中央圖書館の圖書を無料で閱覽なし得るのである。夫を當圖書館で巡回文庫と言ふ。

そこで、巡回文庫とは何か。

巡回文庫とは或る圖書の集を、中央圖書館から個人又は團體に對して、一定期間を貸出し、それを巡回的に所定の箇所へ回附し閱覽せしむる貸出文庫の一種である。目下本圖書館に於ては、請求者に圖書を送附し之を一定期間(三箇月)留置き、期間經過すると同時に、再び本圖書館に返送する方法を執つて居る。

巡回文庫の回附先は、縣下の市町村役場、公立圖書館、公立學校、小學校、青年學校、青年團、婦人會、その他館長に於て適當と認めたる團體で、例へば會社、銀行、工場、教會などは、最後の項目に該當する。

巡回文庫の回附を受けるには、前記諸團體の代表者の名を以て、本館々長宛に端書又は書狀なりで、その由を御申込まれるば、手續をして本館から印刷した請求用紙を御送りする。

巡回文庫の編成は、請求者の希望に依り、豫め巡回文庫圖書目錄を無償でお頒ちするから、之に就て希望の圖書を指定されるならば結構、たゞ偶々その希望の圖書の内、他に貸出しになつて

る場合もあること故、その節は希望圖書に準じた圖書を本圖書館に於て選擇の上、送附する。又編成上特に書名の希望なくば、或は隨筆物とか、修養物とか、婦人物とかの希望だけでも宜しく、更に圖書に對して何等の指定がなくとも、本館に於て利用者の種別を考慮した上、適當なる圖書を選擇して送附することになつて居る。一文庫の冊數は約五六十冊で、之を行李に荷造りして送附する。

巡回文庫の留置期間は、三箇月を規定としてあるが、希望により伸縮することが出来る。

巡回文庫を受取られたら、添付の圖書目録と圖書とを一應對照の上、折返し受領書を本館々長宛に送られたく、受領用紙は發送文庫に添付しておく。

巡回文庫使用は無料。但し當分運賃は往路を本館で負擔の代り、返送費だけは、請求者の方で持つことになつてゐる。

巡回文庫の管理、この管理方法如何が、實に巡回文庫運用の活殺を握る鍵と思ふ。管理者は第一に進取的、能動的態度を以て、指導者の地位に立つてもらひたいと思ふ。乃ち巡回文庫は最も簡易なる公共圖書館である性質上、能く圖書館の性能に通じ、之が利用に十分の注意を拂はれたい。常に圖書を中心に、讀書を第一として、讀書會、講演會、座談會等の事業を結合して、或は

新刊紹介なり新着目録を作成して、管内一般に周知せしむる等、凡ゆる積極的態度に依り、讀書の習慣に親しむべく努力を惜まぬやう願ふ。

閱覽所は教室、事務所、社務所、或は個人の家の一室など適當に選ばれてよろしく、大體は自家に持ち歸つて閱覽する者が多いと思ふ。その場合閱覽所では一時に二冊、持ち歸りの時は一冊、その期間一週間以内といふ標準を作つておいたが、之も管理者にて適當に取計つて差支へはない。

何れにしても圖書を貸出した時は必ず本館より送附せる館内或は帶出閱覽簿に書名、記號、氏名、職業をそれ／＼記入せしめられたく、管理者は又成績報告書に必ずその統計記入を忘れず記入の程を願ふ。之は中央圖書館に於て圖書利用上非常に参考になるもの故、注意ありたし。

要するに管理者はよく本館と聯絡を執り、圖書運用上に就き何かと御努力あらんことを祈る次第である。

以上巡回文庫の利用は少しもむづかしいことではなく、一ヶ年大約四圓もあれば二百乃至三百冊の圖書を、限りなく閱覽せしめ得ることを意に止めて益々之が利用されんことを望む。尙ほ請求者の希望に依り、一時に二文庫以上でも送附なし得る。

中央圖書館完備と縣下市町村民との關係

由來圖書館と言へば文化といふ総合的な魅力に引きずられて専ら都市の専有物かの感を抱き易く、圖書館の利用者も亦交通便利なる都會居住者に限られた者かのやうに考へられて來た。

乃ち農村などでは、先づ交通上の關係から、圖書館に行くことを非常なる難事とされたり、更に「百姓には學問はいらぬ」との因襲的觀念から脱し得ず、生活上の必要感を認めずして讀書生活の教養を怠り、その結果日毎の生活は、單なる現世的、消極的生産に甘じようとする状態であり、殆ど圖書館なるもの、存在すらも無視しようとする現状である。

然しながら彼等農村民にとつても、圖書館は決して無用の贅物たる筈はない。尤も進歩せざりし頃の圖書館、言ふならば圖書館は單に良書を買ひ込み、之を理論的に書庫に排列して、館員は只拱手來觀者を待つのみものならばいざ知らず、尠くも近代的自覺を以て經營する今日の圖書館にありては、良書を有するならば、先づ之を最も有効に多數の者に利用せしめねばならぬ使命がある。而もそれは必ずしも都會居住者に限らるゝに非ず、寧ろ縣立圖書館であるならば之を縣

下一般に知らしめ親しく繙讀せしめ、以て思想の向上、産業隆盛の準備知識たる基礎を定めねばならぬ。之は生柔しい宣傳文では通じらぬものでない。何よりも先づ縣立中央圖書館の凡ゆる機能を完備せしめ、之に依つて地方文化の上に十分なる觸手を伸ばしむる必要があると思ふ。

今や教育機會の均等を可能ならしめ、國民の精神的並に物質的の生活の要素として、之を活用せしむるに足るの施設經營を要する圖書館の必要なることは、最早誰しも異存のない事實で、圖書館は實に社會教育事業の重大なる一項として、教育家及識者の大に意を用るねばならぬことである。

凡そ如何なる事業と雖も、その眞の發達は官民の協力に俟たざるものはない。就中對民衆的教育機關たる圖書館事業の如きに於ては、特にその然るを感ずる次第である。而して官民協力に依り一度縣に中央圖書館の設立あり、その施設完備するならば、所謂中央圖書館の機能の發動と共に全縣下市町村に向つて、文化の向上は勿論、圖書館の有する本然の使命を遂行なし得るや言を俟たないのである。

然らば縣下市町村に對する中央圖書館の使命とは如何、以下順次述べて見よう。

一、貸出文庫の配給

凡そ人類の幸福を増進せしめる文化の向上には、知識の發達と傳播との二つの作用が緊要である。この二つは互に相應じ相伴つて作用するもので、光つた知識が冷く傳播されると、やがて新しい發見を生むものである。いくら貴き知識たりとも、廣く傳播されなければ一般から認識される筈もなく、終には新らしきものを生むことなくして消失してしまふ。かくて傳播は新らしき發見の芽を出すべき耕地だとも言へる。乃ち圖書館はかゝる知識を傳播をなす一種の機關である。假りに吾人必讀の良書を書庫に排列しあるとも、之を利用せしめ徒らに書庫の塵埃に埋もらしむるならば、圖書館の眞の生命は滅亡に等しき解である。宜しく之をしてより多く利用せしめねばならぬ。乃ち圖書館に來り之を利用なし得ざる境遇にある者に對しても進んで利用の道を講じねばならぬ。

茲に貸出文庫の施設ある所以である。貸出文庫とは、中央圖書館より普通數十冊の圖書を纏めて、一定の箱なり行李などに納め、鐵道、自動車、馬車、其の他の方法に依り、市町村に於ける各所の團體又は學校、個人宛に送附し、一定の期間を附してその輸送先の責任の下に、縣下地方民に自由閱覽をなさしむる組織である。つまり地方民は必しも中央圖書館に行かずとも、居なが

らにして中央圖書館所藏圖書の配給を受け之を利用し得る解である。又その輸送圖書に對しその選擇を爲し得べく、特殊研究をなす地方人士たりとも何等の不便を感じない。

この貸出文庫は、中央圖書館としては當然施行すべき義務があり、改正圖書館令施行規則にも第七條第一項に於て「貸出文庫等の施行」を實施すべしとある。乃ち名のみ中央圖書館ならばいざ知らず、完備せる中央圖書館たるには此の要素を除外することは出來ぬ。取りも直さず貸出文庫を實施なし得ぬ如き圖書館は斷じて中央圖書館の資格なきものである。蓋し貸出文庫こそ中央圖書館より、縣下市町村に對して最も能く伸ばされし觸手にして、この觸手により廣く圖書館自體の使命である知識の傳播を施行し得るのである。

但し如何に中央圖書館の觸手が能く伸び得るにしても、該事業の性質と効用とが能く地方一般民衆に徹底理解されずば何等の反響を聞くことは出來ぬ。それには地方在任の識者並に教育者の奮起と熱心なる援助とを望まずにはゐられない。勿論之が宣傳と指導のためには中央圖書館より専門の當務者が町に巡回して、町村の青年團、處女會等の集會、又は學校の教職員會などの席上に於て、該機關の宣傳並に圖書利用の講演などをなし、貸出文庫の効用を徹底せしむるに吝であつてはならぬ。



二、分館及市町村圖書館の施設經營に關する指導並に聯絡

凡そ近代圖書館としての眞の使命は、一方に於て學問、藝術等凡ゆる専門書を初め娛樂書等をも蒐集して、館内に於て閲覽せしむると同時に、他方に於ては一般公衆に對して、之を館外に貸出して自由選擇の閲覽を期するにある。殊に後者の事業に於て然りとし、斯かる目的を洽く徹底せしむる上に於て、前記貸出文庫の施設の必要なることは勿論なるが、尙ほその上に分館制度がある。

分館とは中央圖書館に對して、例へば本支店の關係を有するものと言ひ得べく、分館自身が豫め管轄區域を有し獨立の建物を有することもあるが、屢々學校又は團體に併置されることもある。之等の分館はそれ自身數千の永久的藏書と、或程度の閲覽室を有するを特質とし、尙その上に中央圖書館の藏書を利用して、通例經營事務は中央圖書館の指導を受くることになつてゐる。

乃ち中央圖書館より分館への圖書貸出をなし、分館に於て閲覽せしむること、なる。蓋し中央圖書館より言へば一種の館外貸出にして、地方人はその市町村に在る分館を通じて、中央圖書館の藏書を閲覽なし得る解である。

市町村圖書館は、市町村自治體の經營する小圖書館を意味し、それ自體一箇の圖書館體形を具

へたものと言へなくとも小學校に併置されてゐる簡易圖書館なども此の類にして、中央圖書館とは必ずしも本支店の關係にある分館のごとき間柄ではない。併しながら同一縣下内にある圖書館として、苟くも中央圖書館の存在する以上、中央圖書館と聯絡提繫を密にし該事業の圓滑なる發達をなさしむるため、相互の聯絡を附けざるを得ない。又市町村圖書館相互間の聯絡を取る上に於ても、中央圖書館の適宜なる統制あることは最も望ましきことである。

言ふならば分館といひ、市町村圖書館と言ひ、凡そ中央圖書館活動から言ふ時、必要なる補助機關と見なすを得べきもので、之等の聯絡が圓滑にゆき、統制が取れて居るならば、中央圖書館の機能は期せずして能く活動なし、全圖書館事業の發達又見るべきものがあると思ふ。

三、停本所及配本所設置

中央圖書館完備せる曉には、此等の機關は當然設置さるべきである。

停本所は地方學校、工場、會社、俱樂部等の内に設置され、中央圖書館より廻送されたる數百冊の圖書を一時的に保管し、之を運用貸出なすもので、本館より館員を派遣し又は施設地の教員、工場、會社員等に委任して當該事務を司らしむるものである。

配本所の前者と異なる所は、そこに何等特置の圖書を有することなく、たゞ讀者よりの注文により所要の圖書を中央圖書館から取寄せて貸出し、又返済されたるものを取纏めて本館に送致する手續を行ふ所で、一種の中繼機關である。

何れにしても、之等の機關を通じて、中央圖書館所藏の圖書は直接縣下市町村民の利用に任じ、彼等の向上に對して裨益なすものである。

四、讀書趣味の獎勵

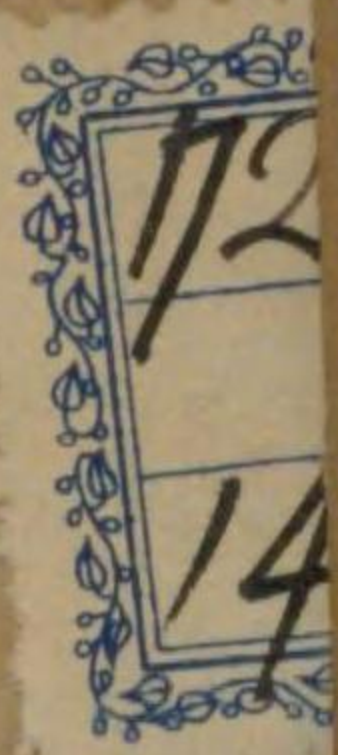
讀書趣味の擴大されることは、その民衆の趣味の向上を意味するは勿論、之により享くる人生上の幸福は偉大なものである。しかしながら、地方民に向つて徒らに讀書獎勵をなすとも、如何なる圖書を讀むべきか、如何に圖書に親しむべきかに曉通しない者にとつては、殆ど風馬牛の感なきを得ない。又假令讀書の必要を知り、圖書に親しむべきを信じつゝも、如何なる圖書に親しむべきかに迷つてゐる者もあり、求むべき財力のない者もある。之等民衆に向つて、若し前述のごとき諸機關を通して、中央圖書館の有する圖書を自由に利用なし得る武器を備へて、一度本館員が讀書獎勵をなすならば、その効果必しも一場の空論に終る筈がないと思ふ。又圖書館員とし

ても讀書獎勵は彼等の一つの使命である。乃ち中央圖書館の施設具備されるればされる程、之等の使命を果し得ることは容易である。

五、館外講演の普及

圖書館の使命はその藏書を以て、永久的文化施設の資源たらしむるは勿論、之により思想善導の一助たらしむることも容易である。それには不取敢圖書館に親しむことを獎勵せねばならぬ。強制して圖書館を利用せしむるのでなく、第一に圖書館をして親しみやすい所、楽しい所とまで思はしめねばならぬ。斯くすれば必ずや圖書館利用者は増大すること、思ふ。けれども亦一方に於て圖書館に民衆を惹付けると共に、圖書館自身が公衆の中に進出して、彼等の覺醒を促すことも、近代圖書館が有する一大使命である。乃ち館外講演のある所以である。

中央圖書館完備して、確固たる地位を得る曉には、獨りその圖書館所在地たるのみならず、縣下各市町村に向つて圖書館を基礎としたる講演乃至讀書獎勵の運動を十分になし得るのである。乃ち中央圖書館の施設十分に具備される時、斯くして圖書館の觸手を有効に用ゐる得られるわけである。



六、良書選定

由來我邦一般の情況を見るに、讀書趣味の涵養十分ならざるを思ふ。町村にありては殊にその感を深うする。例へば書物を購ふよりも映畫館に行かう。雜誌一冊を買ふよりは、半襟の一掛けでもといふやうな状態が、今日青年男女の趨勢とも言へる。

この時、少くも一般よりは圖書に就て曉通してゐる圖書館員をして、機に臨み折に觸れて讀書の効用を叙説すると共に、良書を選定して之を讀ましむる習慣を付けしめねばならぬ。勿論之に就ては地方町村の有識者、教育家の援助も俟たねばならぬが、中央圖書館完備すれば機能備りて良書選定もなし得、之を地方分館、町村圖書館、乃至地方新聞などを通じて、一般に公示出來得べく、讀書趣味の普及と相俟つて、良書推薦により、思想善導の一助ともなるわけである。

七、讀書相談

地方市町村にありては都心を遠ざかるに従ひ文化施設の伴はざることは否みがたい事實である。従つて都會の動き、一般社會の動向等に關心を有する以上、何らかの方法により之を察知せねばならぬ。この點圖書は都會の一使者であるとも考へられる。それ故身町村に在りて、個人と

して、或は團體としてでも、或る一つの問題に就て疑問を生じた場合、之が解決の近道は、何と言つても圖書に依る外ない。然るに今日出版される圖書の數は枚舉にいとまなき位なるを以て、身町村に在つては到底適當なる圖書を選び得ることは出來ぬ。この場合、中央圖書館に向つて質疑されるれば出來得る限り、その質疑者に對して満足せしむる解答をなし得べく、是又中央圖書館の爲すべき一使命でもある。例を以て舉ぐれば、町村に於て一産業的施設を行ふ場合に於ても、まづその準備知識、實際施行の經過、且つその利用等に就て調査せんとする場合、先づ中央圖書館に對して、該事業に對する適當なる圖書の有無等を相談されるならば、圖書館に於ては之を選定し、該圖書を分館なり停本所なり貸出文庫の手なりを経て、實際に送附でき得るわけである。乃ち圖書館は「よろづ相談相手」となり、之を直接、間接に地方町村に向つても、實行なし得る所以である。以上數項に亘り、中央圖書館完備後の、縣下市町村に對しての影響如何を叙説したが、要するに中央圖書館完備の曉は、單にその所在地たるのみならず、縣下至る所の町村に對しても、十分にその機能を活躍せしめ、眞に圖書館としての使命を果し得べく、縣全體に亘る文華基準を高め得る事は、必しも難事業ではない。

顧みて想ふ。今や我が紀州は商工業に、産業に、將た觀光事業に、凡ゆる施設を整へて、大に雄飛せんとしつゝ、ある秋である。この秋、この際、文化の母胎たる圖書館が獨り時勢にそむき、全國的に最下級のレベルに置き去られることは、まことに忍び得ないことである。私は自が半生を托し來れる一圖書館人の立場に立つて、和歌山縣立圖書館の更生完成のため、敢て曉の鐘を撞かんとする所以もここに在る。幸に識者の耳底に達し、縣當局の一顧を得れば幸と思ふ。

昭和十一年十一月一日印刷
昭和十一年十一月五日發行

紀州萬華鏡 (定價壹圓)

著者 喜多村 進
 發行者 和歌山市本町一丁目四番地 津田源兵衛
 印刷者 和歌山市真砂丁一丁目一番地 林孝一

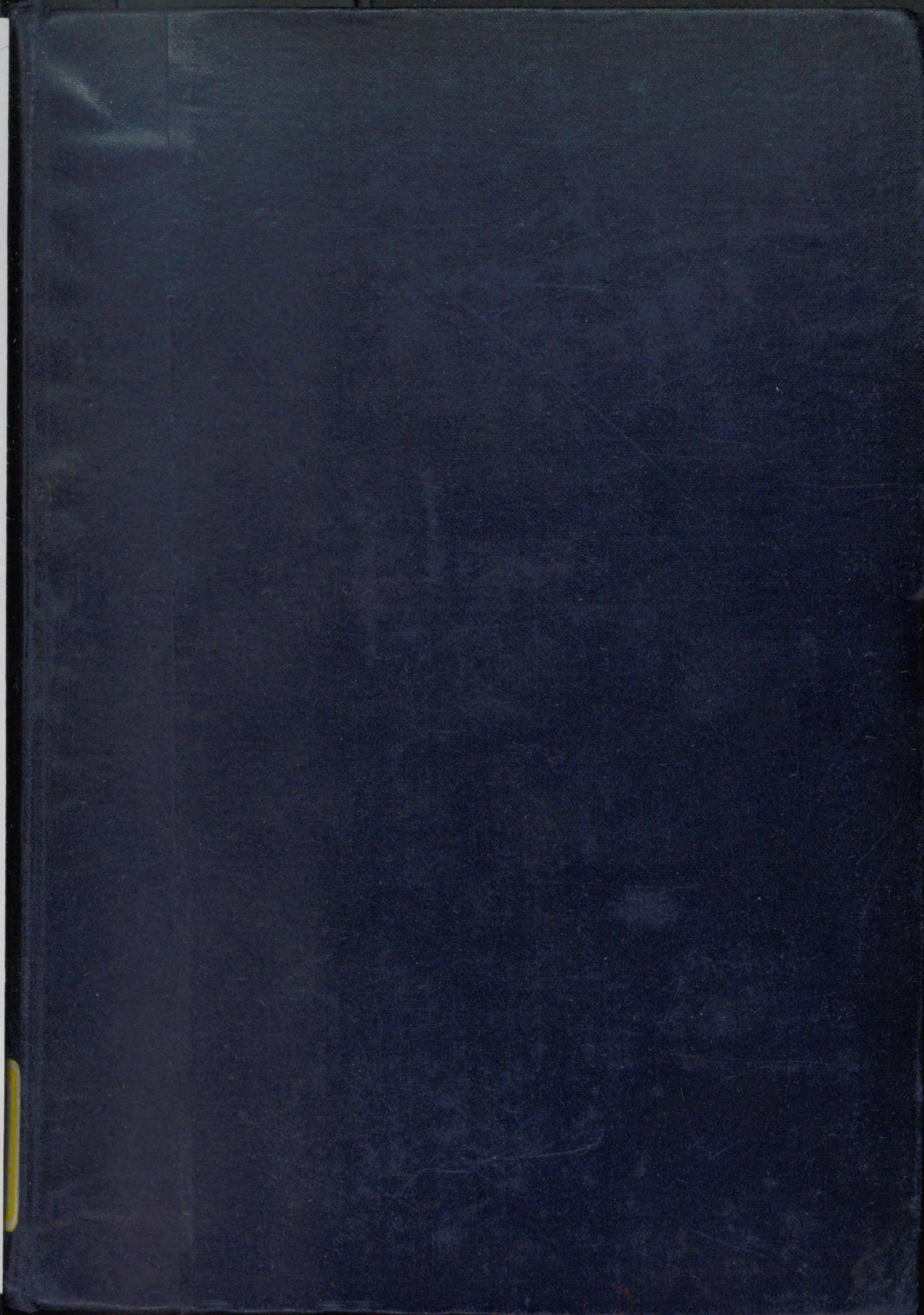
發行所 津田源兵衛書店

和歌山市本町一丁目
 振替大阪二六四八七番

172
14

12
14

1720
143

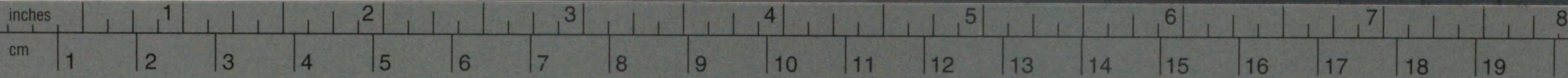


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

